

政経分野の内容構造の問題

— 高校を中心に —

高 森 充

要旨 教科書の内容配列の問題点を考察し、特に高校の経済分野について、3クラスの指導内容を、マル経・近経・及び両者の折衷的取扱いと、三者の授業の結果を比較検討する。

1. 政経分野の内容配列の問題点

先づ現行の指導要領による内容項目をみると次のようになる。

高校 (政経)	中学 (政経社分野)
日本の政治 ①民主主義の本質 ②日本国憲法の基本問題 ③日本の政治の諸問題	近代社会と民主主義 近代民主主義の原則 人間と社会生活 民主政治の組織と運営 日本国憲法と民主政治 政治の組織と運営 選挙と政党
日本の経済 ①国民経済の循環と発展 ②日本経済の構造 ③日本経済の諸問題	産業・経済の構造と機能 経済の組織と動き 財政と家計 わが国の経済と産業構造の特色
労働関係・社会福祉 労働関係の改善 社会福祉の増進	現代の社会生活と文化 家族生活 都市と村落の生活 職業と社会生活 文化と社会
国際関係と国際協力 国際社会と国家 国際政治・経済の動向 国際関係と日本	世界と日本 国際社会の現状 国際平和と国際協力 現代の諸問題 産業経済の振興 国民生活の向上 文化の伝統と継承

項目によって見る限りにおいては、中・高政経分野の内容にはかなりの重複がみられる。のみならず、中学における週配当時間が4時間、高校におけるそれが2時間が普通であってみれば、高校における内容の配列・編成・指導方法には多くの困難点と改善の余地がある。特に高3の場合、3学期の授業はほとんど1

か月足らずの現状からすれば配当時間はさらに圧縮され、2単位で年間50時間程度に過ぎない。このことから、高校における政経の教材編成にさらに重点的かつ、内容の精選が要求されよう。

所で、教科内容の精選は単にあれこれの項目をただ単純に整理統合し、しかも指導要領にあげられた内容領域を網羅することによって果されるであろうか。そうではなく、現行の教科書自体甚だしく羅列的傾向が強いとすれば、一定の原理に従って思い切った組みかえが必要なのではなからうか。それを検討する一端として、現在使用中の政経教科書について、その内容項目のウェイトを頁数とその比率によって比較すると次の表のA欄の通りである。

表1 政経教科書の内容項目の比重

	単元	政治			経済			労働社会	国際
		①	②	③	①	②	③	—	—
A	頁	23	16	19	10	22	25	21	41
	%	13.0	9.0	10.7	5.6	12.4	14.1	11.8	23.1
B	点数	30	30	16	19	21	20	5	12
	%	19.6	19.6	10.4	12.4	13.7	13.0	3.3	7.8

他方、上の表のB欄は名大文科系学部の社会科学教育法受講者のうち、政経専攻希望の者(10名)に、教科書の内容を検討させ、ウェイトをつけさせ(1~5位)これを点数化したものと、そのパーセントを示したものである。これによれば、教科書の頁数によるウェイト以上により徹底して政治・経済単元に重点を置くべしとい意見が強い。(政治に49.6%、経済に39.1%計88.7%)反対に、特に削除すべき項目をあげさせたところ、「社会福祉」の一部、「国際関係」の多くの部分について削除の意見がでていた。さらに「文化」の諸問題については「倫理社会」に移すべしという意見も見られた。一方、とり入れるべきものとして、社会主義の基礎的知識及び問題、法学の初歩を体系的に、現実の社会問題等があげられていた。

2. 政経教科の構造的性

所で、内容の精選、教材配列の整理統合、再編成を行う場合、そこには言うまでもなく一定の原則がなけ

ればならない。それは羅列的、並列的の原則ではなく、内容の高度化・科学的水準を維持する方向で編成されるべきであろう。教材構造は課題性と順次性と系統性の原則に支えられていなければならない。端的に言えば科学性の原則である。例えば経済の内容をとり扱う場合、その原則の適用はあれこれの現実的諸問題や雑多な経済現象を網羅的に学習するのではなく、経済学者がやったように、我々の思考過程をそれに近づけて考える追求的、発見的学習が要求されよう。まず基礎的概念や根幹となる抽象から出発する。しかもその場合、大切なのはあれこれの経済学説や雑多な経済事項の記憶ではなくて、代表的な経済学の根幹を学ぶことではなからうか。すぐれた経済学者は常に現実の経済現象を前に、その解決のための方法の探求、つまり課題性をもって出発した。しかしその為こそ、冷徹な科学的研究に没頭する。とりわけ偉大な社会学者はマクロ的分析とミクロ的分析の手法及び、それを貫く社会観をもっている。高校生も又、経済の学習によってその一端にふれることができないものか。勿論、学

習指導への具体化は決して簡単ではないであろう。しかし敢て、実験的試案の一例を次にかかげよう。

3. 経済単元の授業比較

高校3年3クラスについて、次のように内容及び取り扱いを変えて、比較研究授業を2学期間継続（42年9月～12月まで）して行なった。

A（組） 教科書を中心にして、題材によってマル経及び近経の立場から。

B（組） マル経の初歩を系統的に扱い、教科書の内容もその立場から編成がえしてとり扱う。

C（組） ケインズ経済学の初歩を系統的に扱い、教科書の内容もその立場でとり扱う。

（使用教科書は実数「政治・経済」で経済単元は都留重人、伊東光晴の執筆による）

ここで特に対照的なB及びC組の内容項目を掲げると次のようになる。

授 業 内 容 の 比 較

B（マル経）	30時	C（近 経）	30時
第1章 資本主義経済の構造		第1章 現代資本主義の特徴	
1. 経済学の系譜とマルクス		1. 近代経済学の系譜とケインズ	
2. 生産力と生産関係		2. 資本主義の経済体制	
3. 商 品		3. 資本主義の変化	
4. 貨幣と資本の運動		4. 資本主義の危機と新しい経済学	
5. 再生産過程		5. 国民所得モデル	
6. 競争・利潤・価格		(1) 古い市場理論と新しい市場理論	
7. 景気変動と恐慌		(2) 国民所得の巨視的モデル	
8. 資本の集中、独占と帝国主義		(3) 消費性向と有効需要	
9. 資本主義と社会主義		(4) 投資と貯蓄の関係	
(1) 国家独占資本主義と修正資本主義の経済政策		(5) 乗数効果（乗数理論）	
(2) 社会主義		6. 貨幣と金融	
第2章 日本経済の諸問題		7. 景気変動と金融・財政政策	
1. 日本資本主義発達史		8. 新しい病い ——しのびよるインフレ	
(1) 発展構造		9. 資本主義と社会主義	
(2) 近代日本経済史（戦前）		第2章 日本経済の成長と問題	
(3) 戦後・資本主義経済の展開		1. 近代日本経済の歩み	
2. 現代日本経済の諸問題		2. 戦後の発展	
(1) 農業問題		3. 経済成長と産業構造の変化	
(2) 産業構造の変化		第3章 社会保障	
(3) 雇用その他の問題		1. 国民生活をめぐる問題	
第3章 労働問題と社会保障		2. 社会権の具体化	
1. 労働問題の発生と展開			
2. 社会権の具体化			

政経分野の内容構造の問題

以上の内容について、2学期の初め、各組に内容の大綱を示し、比較研究授業の主旨を説明し、毎時間男・女1名ずつ順番に「授業記録ノート」を分担させ、当日の授業内容、質問、感想等の記入を義務づけた。中間テスト(10月16日)までに各組共第1章第8節まで、期末テスト(12月11日)までに、第1章の残り(資本主義と社会主義)と第2章(日本経済の諸問題)を終えた。

これによって、中間テスト及期末テストを行い、3クラスの成績の比較、授業記録ノート、アンケート等によって、理解の仕方、受けとめ方等の差異をみることにした。

4. テストの結果と考察

(1) まず第1章を中心とする中間テストを中心に検討する。問題は大きく2つに分けられる。No1とNo2である。さらにNo1の1は近代における経済学の発展の系譜を問う。2のAは資本主義の発展とそれに伴う問題点と対策を主として近経の立場から問うもの、Bは資本主義発展に伴う矛盾や社会問題を主としてマル経の立場から問うもの。及びNo2の問題から成っている。

結果をまとめて示すと表2の通りである。

表2 テスト結果の比較(まとめ)

No 平均 組	No 1 (60点)				No 2 (40点)	合計 (100点)
	1	2のA	2のB	計		
A組48名 (折衷)	5.5	13.1	16.7	34.3	22.8	57.1
B組46名 (マル経)	9.3	10.1	17.1	36.5	23.8	60.3
C組47名 (近経)	7.1	13.3	16.0	36.4	28.3	64.7

なおNo2の小問の結果を示すと次のようになる。

1. 労働賃金の決まり方

(点)	A 組	B 組	C 組
	人	人	人
○(10)	12	12	21
D(7)	10	14	15
D(4)	20	16	9
×(0)	6	4	2
平均	5.75点	5.98点	7.7点

2. 企業活動の利潤

	A	B	C
○(10)	9	21	12
D(7)	18	17	21
D(4)	11	8	12
×(0)	10	0	2
平均	5.42	7.85	6.70

3. 商品の価格決定

	A	B	C
○(10)	18	14	19
D(7)	14	9	21
D(4)	13	17	7
×(0)	4	6	0
平均	5.0	5.89	4.04

4. (A・B選択)

㊤投資の波及効果(乗数理論)と政策的意義

	A	B	C
○(10)	9		15
D(7)	12	2	16
D(4)	10	1	11
×(0)	14		5
平均	4.65		6.51

㊦再生産表式にもとずき $C_2 = V_1 + M_1$ の証明

	A	B	C
○(10)		12	
D(7)	1	1	
D(4)	2	7	
×(0)		23	
平均		3.52	

(注) (各問10点)

まず表2によって(テスト結果の比較)を見ると、総点については、C組の近経クラスがよく、(64.7点)次でBのマル経クラスが(60.3)、Aの折衷クラスが最も悪く(57.1)、C組との差7.6点となっている。この差は100点満点であっても、かなり大きいと見なければならぬ。もっとも、No1の問題については、B・C組にほとんど差がなく、No2の問題によって

差がひらいたことが明らかである。特に4の⑥の問題がB組にはかなり難かしかつたと考えられる。

それにしても、A組(折衷クラス)が不成績なのは期末テストにも明らかであるが、結局あれもこれもということで生徒の理解に混乱を生じ、不徹底な認識に終わっているものと推定できる。

(2)次に第2章(日本経済の諸問題)を中心に行った期末テストの結果をみよう。問題は4問、1は日本資本主義論争について、所謂「講座派」と「労農派」の主要問題に関する見解の相違を問う。2は日本資本主義の発展構造の図式の空欄に適切な言葉を入れる問題。3は戦後経済の発展に関する時期的区分と主要事項の関連を問う。4は日本経済の将来についての判断とその理由を問う。

以上の問題はかなり程度の高い問題であり、必ずしも適切とは言えないが、結果は次のようになった。

先づ総点(100点)について、

A組(折衷)55.4, B組(マル経)64.1, C組(近経)66.7である。ここでもC組がよく、A組が予想以上に悪くなっている。折衷とはいふものの、マル経と近代の生硬な概念が混在して、認識に混乱をもたらしただものと断定してさしつかえないであろう。

特に小問1を選んでその結果を比較すると次のようになる。

表3 日本資本主義論争について

(注)	K=講座派的理解 L=労農派的理解	A(47)		B(46)		C(46)	
		○	D	○	D	○	D
①幕末の経済発達段階	K	15	8	22	1	18	7
	L	13	4	16	6	16	5
②明治維新の性格	K	17	8	32	3	27	8
	L	16	9	31	2	23	9
③地租改正の役割	K	15	9	18	8	15	10
	L	11	14	13	7	12	16
④第2次大戦後の農地改革をどうみるか		17	11	29	12	20	12

これによってみると、B組にK的な理解が多く、A組に少ない。L(労農派)的理解もA組に少なく、B・C組にやや多くなる。

いずれにせよA組の理解が不十分なことがわかる。

なお参考として、4つのことがらについて、アンケートをとってみた。一覧表にして示すと表4の(1)から(3)のようになる。

表4-1(1) 資本主義における失業問題について
<数値はパーセント>

	A	B	C
失業の発生は必然かつ不可避である	15	36	28
失業は発生するが調節できるし、対策もある	77	60	67
完全雇用政策によって、失業はなくなる	6	2	5

4-1(2) 資本主義における景気変動について

	A	B	C
経済恐慌はいつか必ずおこる	34	49	27
不況や景気後退は起るが、調節が可能である	52	45	44
修正資本主義の政策により、恐慌はおこらない	10	1	20

4-1(3) 将来の日本経済について

	A	B	C
もっと経済がのび、高度成長が可能	9	14	21
経済はのびるが、歪みが大きくなり のびなやむ	54	56	59
高度成長期は終わったから、ゆきづまりが必ずくる	35	28	20

これらによってみると、近経(C)及びマル経(B)の学習効果、影響についての違いが、かなり明瞭に出ていると思う。特に(2)の景気変動についての見方の違いは大きい。このことは(3)の日本経済の発展予想についても、明らかに近経(C組)の側に楽観的な見方が多くなっているのとパラレルであるといえる。

おわりに

3クラスの比較を通じて要約すれば、ほぼ次の諸点が指摘できよう。

(1) 全体として、B(マル経)とC(近経)の差よりも、A(折衷)とB・Cの差の方が大きい。

(2) マル経、近経いずれにせよ、より系統的、体系的な内容構造をもつものの方が、単なる折衷的、網羅的な内容のものよりも理解がすぐれている。

(3) 授業記録ノートやアンケートに見られる限りにおいて、資本主義経済の受けとめ方、理解の仕方にもB、Cの間でかなりの差がある。

(4) 次表にみとめられるように、授業への抵抗感にはB組(マル経)に最も強く、A組(折衷)がそれに次でいるがC組(近経)に少ない。その一つの原因は教科書そのものが、近経的内容が中心になっていることの影響であろう。

二学期の授業について

(%)	A	B	C
難かしいが、勉強になる	20	32	16
難かしくて、理解困難	50	51	20
それ程でもなく、普通	29	14	61

最後に、授業記録ノートについては、毎時間男女1名ずつに、順番に担当させ、次時のはじめに記入された感想、質問への批評、説明を行い、その時間の導入的扱いともすることができ、効果的であった。

これは日々の授業の評価、反省のためにも今後とも継続さるべき、よい方法だと考えられる。